

中年女性の幻覚妄想状態 (第2報)

——性愛を主題とする妄想——

浅野 弘毅, 近藤 等

はじめに

性愛を主題とする妄想には、恋愛妄想と嫉妬妄想があるが、中年女性に多く認められるのは嫉妬妄想である。にもかかわらず、今回の報告の副題を「性愛を主題とする妄想」として、嫉妬妄想に限定しなかったのは、近縁の病態も含めて検討したいからである。

まずはじめに、嫉妬妄想に関する国外の研究のうち、代表的なものを表1に示す¹⁻¹¹⁾。

Kraepelinは、教科書第3版で、結合性迫害妄想のなかに嫉妬妄想を記載し、更年期の婦人に発展すると述べている¹⁾。

表1. [嫉妬妄想] 研究史 (国外)

1889	Kraepelin, E.	combinatorischer Verfolgungswahn
1901	Schüller, A.	Eifersuchtswahn bei Frauen
1910	Jaspers, K.	Eifersuchtswahn. Ein Beitrag zur Frage; "Entwicklung einer Persönlichkeit" oder "Prozeß"
1918	Kretschmer, E.	sensitiver Beziehungswahn
1920	de Clérambault, G.	psychose passionnelle
1922	Freud, S.	Über einige neurotische Mechanismen bei Eifersucht, Paranoia und Homosexualität
1947	Lagache, D.	jalousie amoureuse
1950	Ey, H.	jalousie morbide
1961	Shepherd, M.	morbid jealousy
1967	Pauleikhoff, B.	Eifersuchtswahn
1967	Tellenbach, H.	Zur Phänomenologie der Eifersucht

Schüllerは、飲酒しない女性の病的嫉妬をとりあげ、更年期の意義を強調した²⁾。

Tellenbachは、「嫉妬は保持欲求 (Haltenwollen) であり、何か喪失する恐れにさらされている」と述べている¹¹⁾。

わが国の研究¹²⁻²⁴⁾(表2)は、荻野¹²⁾に始まる。小久保¹³⁾、宮本¹⁶⁾は共同体感情の病態に着目し、不実妄想と呼ぶべきことを強調した。山本¹⁴⁾の報告は、わが国でもっとも体系だった研究である。最近、田中²¹⁾は病的嫉妬に関する研究の展望を試みた。

今回、われわれは嫉妬妄想を中心に性愛を主題とする妄想を呈した5症例を提示し、中年の女性の心性と関連させながら検討を試みる。

症例の第1例から第3例までは、典型的とも言える嫉妬妄想であり、病的嫉妬に加えて、被害妄想・幻聴・感情障害などが認められた。

第4例は、夫の不実が言い触らされているという妄想、第5例は、患者自身と夫の不実が言い触らされているという妄想の例である。

表2. [嫉妬妄想] 研究史 (国内)

1957	荻野	構造と成立機制
1966	小久保	共同体感情の障害
1967	山本	病的嫉妬の現象学的精神病理学
1976	倉持	Erosの精神病理
1977	宮本	共同体感情の病理
1978	石川	恋愛妄想との併存例
1985	高橋	分裂病例とパラノイア例の比較検討
1988	迎	共生精神病の夫婦治療
1988	岡野	苦痛の精神病理
1989	田中	病的嫉妬に関する展望
1992	大橋	嫉妬パラノイアの1例
1993	関根	殺人事件鑑定例
1993	吉野	退行期嫉妬パラノイアの1女性例

第4例と第5例を加えて、考察の対象としたのは、非定型的とも言える、これらの症例を通してのほうが、中年期女性の心性が如実にうかがえるからである。

症 例

〔症例1〕 初診時55歳の主婦。

(1) 中学卒。本人48歳の時、先夫が病死した。53歳で現在の夫と再婚。現夫は、本人より8歳年下である。先夫の連れ子を育て、また、先夫との間に24歳の娘がいる。51歳から55歳まで保険の外交員をした。夫とのふたり暮らし。

(2) 病前性格は、無口、内向的、勝気。

(3) 51歳で閉経。

(4) 本人52歳の時に、娘が結婚してひとり暮らしとなった。同年、現夫と再婚同士で結婚した。結婚直後は仲が良かったが、1年位前からうまく行かなくなった。

(5) 55歳の秋頃から、勤め先で意地悪をされるようになった。席を外した隙に、物がなくなったり、契約書が故意に破られたりした。自宅の周りでも「火をつけて燃やすぞ」という声が出て、足音がしたりした。夫が誰かに頼んでやらせたいと思った。外に女がいるので、自分を追い出すために嫌がらせをしていると思い始めた。

(6) 55歳の冬に、慢性肝炎のため、1週間入院した。入院中に「殺す」と聞こえて来て眠れなかった。他患のチューブを抜いたのは本人だと、夫が交番に届けたいらしい。他患を使って意地悪もされた。

(7) 初診時(55歳)「娘のお腹の中の子は、夫の子どもだ」「妹と夫が関係している」「この頃、気弱になり涙もろくなった」「夜も良く眠れない」などと訴える。息子のところでしばらく過ごす、3～4日すると夫のもとに戻りたくなる。嫌な感情をもっているけれど、やはり夫が好きなのだという。自分が家を出ないので、夫は嫌がらせをして追い出そうとしているに違いない。一緒に寝ていても、途中で抜け出して、隣の部屋に女を連れ込んでいる。パジャマにガムが付いていたのは、女を連れてきて寝た証拠である。自分は何も悪いこ

とをしていないのに苦しめられるので、夫を訴えたいともいう。

(8) 嫉妬妄想・被害妄想・幻聴などの症状が認められたが、抗精神病薬の服用により、幻覚妄想は3ヶ月程で消退した。

本症例は、複雑な家庭環境のもとで、夫との感情の疎隔が契機となって、嫉妬妄想が発展したものであり、同時に被害妄想や幻聴を伴っていた。典型的とも言える嫉妬妄想的例である。

〔症例4〕 初診時50歳の主婦。

(1) 高校卒業後、看護助手を5年。23歳で結婚した。2人の娘は独立し、息子と夫との3人暮らし。

(2) 病前性格は、小心、明朗、几帳面。

(3) 49歳から生理不順。

(4) 44歳の時、部品工場のパートに出た。2年後に接着剤を使う部署に変わった。1ヶ月程して、体にむくみが出たり、湿疹が出たりするようになったので、休みがちとなった。この頃から、職場の人に陰口を言われるようになった。A(先輩格の女性)を中心に、周りの皆が自分に辛くあたる。そのために体が硬直しロボットみたいにぎこちなくなかった。職場を休んで内科を転々としたが、どこでも異常がないと言われた。

(5) 会社を休み始めて半年後、近所の人に遠回しに「お宅の旦那さん、浮気している」と教えられた。奥さん達の噂話で「まだ会っている」と聞こえてきて、夫のことに違いないと分かった。この時の夫婦のいざごは近所に漏れてうわさになっていたと思う。

(6) 休み始めて10ヶ月後に退職させられた。退職の挨拶くらいはしたほうが良いと夫にいわれ、出かけようとしたところ、Aとばったり会ってしまい、また体の調子を崩してしまった。翌日、会社に行ってみると、社長の態度が冷たかった。Aの口から自分の家庭のことが、会社に広まってしまった。それを気にしたら、左胸が硬くなってしまった。ようやく自分でも、精神的なものが原因していることが分かった。

(7) 自ら精神科を受診, 外来治療によって, まもなく妄想と幻聴は消失した。噂がおさまったのは, 本人が近所の人に「このことを解決するには, 旦那さんに言うしかない」と釘を刺したためであるという。それから間もなく夫の浮気もおさまった。ストレスによって体の不調が起こったと本人なりに解釈しているが, 妄想については病識がえられなかった。

本症例には, 被害妄想, 夫の不実に対する疑惑, 幻聴, 身体的不調感などが認められた。不実疑惑は夫の愛の対象者への嫉妬には向かわず, もっぱら家庭内のもめごとが世間に知れることへの不安に根ざしていた。

〔症例5〕 初診時43歳の主婦。

(1) 高校卒業後, 23歳で見合い結婚するまで, 事務員。結婚後, 半年だけ保険の外交員をした。19歳の娘と16歳の息子がいる。4人家族。

(2) 病前性格は, 明朗, 社交的, 勝気だが几帳面ではない。

(3) 35歳から36歳にかけて, 同じ社宅に住んでいた夫の部下に好意を寄せたことがあった。相手の男性からは何の反応もなく, まもなく転動した。それは, 自分との関係が社宅や会社で噂になったためと思いこみ, 本店の人事部長に直談判に及んだ。そのため, 周囲から異常に気づかれ, 精神

科受診となり, 半年間だけ服薬した。

(4) 38歳の暮れに, 自宅を新築し引っ越した。その2ヶ月後に, 地元の新聞のコラムに, 夫の会社の総務部長が, 本人の過去の事件をあてこすって書いた。それ以来, 新聞各社および夫の会社から電話を盗聴され, ステレオ・TV・車にも「発信器」が仕掛けられ, 家中のことが筒抜けの状態となった。TVのドラマも間接的にあてこする。盗聴によって, 家族に不幸が続発するようになった。父と兄は脳卒中で倒れ, 母は腕を骨折して入退院をくり返している。息子は登校拒否となり, 娘は受験に失敗した。株の暴落で損したのも, マスコミ各社が結託して自分の家庭を崩壊させようと仕組んだことであるという。

(5) 40歳の春, 夫の人事異動の時期に, 同僚の妻たちから, 夫が愛人をつくっているような言われ方をした。夫は浮気をしたわけでもないのに浮気をしたと世間で騒ぎたてられた。夫の同僚の妻が, 夫婦の間がうまくいっていることに嫉妬し, 噂が広まるように画策した。NHKに抗議の手紙を書いたら, ますますひどくなった。このままでは, やられる一方だと思いこみ, 43歳の3月に, 新聞社と夫の会社を相手取り, 損害賠償を求める訴えを提起した。訴状は, 市民法律相談の弁護士に相談しながら, 自力で作成した。以上の妄想とそれに基づく行動を除けば, 日常生活にはまったく支障がない。

表3. 〔症例一覧〕

	1	2	3	4	5
病前性格	無口, 内向的 勝気	明朗, 社交的 勝気, 潔癖, 嫉妬深い	几帳面, 潔癖 神経質, 勝気	小心, 明朗, 几帳面	明朗, 社交的 勝気
家族構成	夫のみ	4人家族	夫のみ	夫と息子	4人家族
発病年齢	54歳	39歳	45~46歳	46歳	35~36歳
閉経	51歳		50歳	49歳	
誘因	再婚	夫の病気	転居	パート開始	夫の部下への 恋慕
症状	嫉妬妄想 被害妄想 幻聴	嫉妬妄想 感情障害	嫉妬妄想 幻聴 感情障害	被害妄想 不実疑惑 幻聴 身体的不調感	被害妄想 不実疑惑 好訴妄想
経過	緩徐発症 短期改善	緩徐発症 慢性経過	緩徐発症 慢性経過	緩徐発症 緩徐改善	緩徐発症 妄想体系化

夫に伴われて、精神科を受診、被害妄想・夫の不実に対する疑惑・好訴妄想などが認められたが、本人にまったく病識なく治療にはつながらなかった。

本症例では、抑圧された不実の衝動が夫への疑惑へと投影されており、フロイドが「投影された嫉妬」⁶⁾と名付けたメカニズムを見て取ることができる。

しかし、むしろそれ以上に際立っているのは、家庭が崩壊することに対する恐れである。

その他の症例については一覧表で示す(表3)。

症例2は、複雑な経緯で結婚した後、夫と夫の通院先の看護婦との仲を邪推するようになったもので、躁とうつの気分変調を伴っていた。往診や保健婦の訪問などを試みたが、治療には結びつかなかった。

症例3は、転居を契機に、夫が近所の女性と関係していると妄想的に確信し、連日のように夫を追求し続けている例で、周期的な不機嫌状態も出現している。嫉妬妄想は、30年にわたり訂正されず持続しているが、最近、脳の老化過程も加わり、病像を一層複雑にしている。

〔症例のまとめ〕

ここで、5例の特徴をまとめてみると、以下の通りである(表4)。

(1) 病前性格は、明朗、社交的、勝気という点で共通しており、それに几帳面、神経質な面が加わり、広義の循環気質といえることができる。

表4. 〔症例の特徴〕

(1) 病前性格: 広義の循環気質
(2) 発病状況: 夫婦関係の希薄化
(3) 発病年齢: 30代後半～50代前半
(4) 誘因: 対人関係の拡大
(5) 発症: 緩徐
(6) 病像: 不実疑惑・嫉妬妄想・被害妄想
(7) 経過: 妄想発展・人格変化を欠く

家庭環境や結婚の経緯に複雑な事情を抱えている例が多い。

(2) 発病状況としては、夫婦間の愛情が希薄になっていることがあげられる。

(3) 発病年齢は、30代後半から50代前半まで広がっており、必ずしも閉経期に集中してはいない。

(4) 誘因は、さまざまであるが、共通項を取り出すとすれば、対人関係の拡大である。循環気質者は、一般に対人関係能力に秀でていとされているが、その得意な領域が躓きの石となっていることは注目されてよい。

(5) 発症は、緩徐で時期を特定することは困難である。

(6) 病像は、一見するところ夫の不実を邪推する不実疑惑または嫉妬妄想のように見える。しかし、詳細に見ていくと、不実の疑惑は夫の愛の対象者に対する嫉妬や攻撃の形をとっていない。恐怖されているのは、夫婦の不和が世間に知れ渡り、家庭が崩壊することである。そのことこそが、中年女性の性愛を主題とする妄想の最大の特徴であ

表5. 〔退行期妄想症・未婚女性の恋愛妄想との対比〕

	退行期妄想症	性愛妄想	未婚女性の恋愛妄想
病前性格	敏感性格	循環気質	分裂気質
発病状況	孤立	夫婦関係の希薄化	出立
発病年齢	閉経期(50歳前後)	30代後半～50代前半	20代～30代
誘因	喪失体験	対人関係の拡大	挫折
発症	急性	緩徐	急性
病像	被害妄想	不実疑惑・嫉妬妄想 被害妄想	被害妄想・家族否認 血統妄想・替玉妄想
経過	妄想発展・人格変化を欠く	妄想発展・人格変化を欠く	妄想発展・人格変化少ない

る。さらに、被害妄想、幻聴、感情障害、好訴妄想のいずれかを伴う症例が多い。

(7) 経過は、妄想の発展傾向を認めるが人格変化を欠く、という特徴をもっている。

考 察

1. 退行期妄想症および未婚女性の恋愛妄想との対比

5例の性愛を主題とする妄想を、第1報²⁵⁾で報告した退行期妄想症と対比してみると、つぎのような違いが認められる(表5)。

(1) 病前性格が、退行期妄想症では敏感性格であるのに対して、性愛妄想では循環気質である。

(2) 発病状況が、退行期妄想症では対人的孤立であるのに対して、性愛妄想では夫婦間の愛情の希薄化にある。

(3) 発病年齢が、退行期妄想症では50歳前後で、閉経と重なっているのに対して、性愛妄想では30代後半から50代前半と幅があり、閉経期に集中しているわけではない。

(4) 誘因は、退行期妄想症の場合、なれ親しんだ対象や所有物を喪失する体験である。一方、性愛妄想の場合は、対人関係の拡大が誘因となっている。

(5) 発症が、退行期妄想症では急性であるのに対して、性愛妄想では緩徐である。

(6) 病像は、退行期妄想症が被害妄想を中心としているのに対して、性愛妄想は不実疑惑、嫉妬妄想が中心で、それに被害妄想が加わる。

(7) 経過は、両者に共通しており、妄想の発展を認めるが、人格変化を欠く。

つぎに、未婚女性の恋愛妄想の場合は、20代から30代の分裂気質者が、出立という状況で、挫折を契機に急性に発症し、被愛妄想・家族否認・血統妄想・替玉妄想などを呈する(表5)。このように、中年女性の性愛を主題とする妄想とは、病前性格・発病状況・発病年齢・誘因・発症の仕方・病像の点で基本的に異なっている。経過は、おおむね中年女性の性愛妄想と類似しているが、一部に人格変化を認める場合がある。

以上、一方では年代的に近い退行期妄想症と、他

方では愛情がテーマという点で共通している未婚女性の恋愛妄想との対比を試みた。

その結果、中年女性の性愛を主題とする妄想は、いずれとも異なり、独自の位置を占めることが分かる。

2. 所有と世間体へのこだわり

中年女性の性愛を主題とする妄想では、夫の愛のありがたさが問われないという奇妙な特徴がある。長い間培い、保持してきた、夫婦という形態、家庭という形態が外からの侵襲によって壊されることへの恐怖と、そのことが世間に知れ渡ることへの不安が主題とされているところに際立った特徴がある。

所有と世間体に対するこだわりこそは、ライフサイクルにおける中年期の特質ともいえるものである。

人間の所有の歴史を広汎に展望した Attali によれば、「持つ」と「在る」とは、本義でも転義でも同一のことがらを意味しており、所有が秘め隠しているのは、死の恐怖にほかならないという²⁶⁾。

残された時間を考え、死を身近なものとして意識し始めるのは、まさに中年期である。所有に対するこだわりは、中年期の心性に深く根ざしていることがらなのである。

ところで、夫婦関係を支えている力には2つあり、1つは、夫婦関係を外側から規制している社会的統制力であり、もう1つは、夫婦の間に働く対人的結合しなわち愛情である。

ところが、中年期に至ると、愛情による結合力は弱まり内側からの統制が無効化してしまう。そして「夫婦間の愛の核心に触れられず、亀裂するかもしれない危惧感」¹⁵⁾をもち続けるということになる。

そのような危機的状況において、夫婦関係を維持するように外から働くのが「世間体」という力である。

わが国の人々は、世間の眼から見られたときの自分を恥じるという、きわめて状況的な倫理を内面に培ってきた。世間体を意識することで、強い自己規制を働かせてきたのである²⁷⁾。

患者たちにとっては、夫の不実が、なによりも

世間体の悪いこととして受けとめられている。そのため、夫の愛情を取り戻すことは二義的なことがらになっているのである。

かくして、中年女性の性愛を主題とする妄想を彩る所有と世間体へのこだわりは、ライフサイクルにおける中年の心理的特性から導きだすことができる。

3. 過剰規範的な行動様式

今回報告した5症例の病前の性格特徴は循環気質圏に属しており、経過中に躁とうつの気分変動や感情障害を伴っていた。また、妄想発症の誘因としては、対人関係の拡大が指摘される。

通常、循環気質者は、過剰ともいえる対象への同一化によって、対人関係を形成、維持している。それが、傍からは人間関係が円滑に行っていると写るのである。

しかしながら、人間関係が拡大し複雑化すると、そこでは役割の喪失と新たな役割の引き受けと同時に必要とされるので、過剰な同一化はむしろ桎梏となる。

Krausは、躁うつ病者の性格構造の根本形式を存在同一化過剰として捉え、「過規範的な対人行動」をとる人が、役割の危機に遭遇した時、躁うつ病が誘発されることを強調している²⁸⁾。

高橋は、中年後期のパラノイド状態はうつ病圏に属するとしうえて、「彼らのおそれるのは、役割によって獲得、保持される家族、財産、地位などの喪失である。……。その極端な例は自己全体(生命、財産、名誉その他すべてを含む)の喪失である」と述べている²⁹⁾。

保持欲求と喪失の恐怖については、先に引用したTellenbachも強調している¹¹⁾。

また、倉持は「嫉妬の情熱は、愛の所有欲に終わるのではなく、夫婦双方が所有する金銭、土地、家屋に至る財産を私有化することを指向する」と指摘している³⁰⁾。

このように、過剰規範的な行動様式の目立つ循環気質者は、社会的役割との過剰な同一化がみられ、社会的な成功や外面的な手柄にのみ目が向いている。それが、中年期に至って、対人関係の拡大場面で躓くと、所有の次元にあるものが侵害さ

れたと受けとり、妄想状態に陥ると考えられる。

妄想の内容が、夫の不実に関する疑惑や嫉妬という、性愛をめぐる主題を選択することの背景には、この年代の女性にみられる内分泌系の変化と性愛生活の不充足とが関連しているものと推測される^{4,24,31)}。

おわりに

性愛を主題とする妄想を呈した中年女性5例を報告した。3例は嫉妬妄想を示し、2例は夫または患者自身の不実が言い触らされているという内容の妄想であった。

5例は、(1)病前性格が広義の循環気質。(2)発病状況が夫婦関係の希薄化。(3)発病年齢は30代後半から50代前半。(4)誘因は対人関係の拡大。(5)発症は緩徐。(6)病像は不実疑惑・嫉妬妄想・被害妄想。(7)経過は妄想の発展傾向を認めるが人格変化を欠く、という点で共通の特徴を有している。

これらの症例と退行期妄想症および未婚女性の恋愛妄想との比較を試みた。性愛を主題とする妄想では、夫の愛のありかは問われず、夫婦という形態、家庭という形態が外からの侵襲によって壊されることへの不安が根底に存在していた。

所有と世間体へのこだわりは、ライフサイクルにおける中年期の特徴である。過剰規範的な行動様式の目立つ循環気質者が、中年期に至って、対人関係の拡大場面で躓くと、所有の次元にあるものが侵害されたと受け取り、妄想的になると考えられた。

(本論文の要旨は、第48回東北精神神経学会総会(1994年10月9日、秋田)において発表した。)

文 献

- 1) Kraepelin, E., et al. (内沼幸雄 他訳編): パラノイア論. p.14, 医学書院, 東京, 1976.
- 2) Schüller, A.: Eifersuchtswahn bei Frauen. *Jahrb. Psychiat. Neur.* **20**, 292-319, 1901.
- 3) Jaspers, K.: 嫉妬妄想—『人格の発展』か『病的過程』かの問題への寄与—, *精神病理学研究1*(藤森英之訳), p.143, みすず書房, 東京, 1969.

- 4) Kretschmer, E.(切替辰哉訳)：敏感関係妄想。文光堂，東京，1961.
- 5) de Clérambault, G. (木村敏夫 他訳)：熱情精神病。金剛出版，東京，1984.
- 6) Freud, G.：嫉妬・パラノイア・同性愛における2, 3の神経症メカニズムについて。改定版フロイド選集10(加藤正明訳)。p.147, 日本教文社，東京，1969.
- 7) Lagache, D.：La jalousie amoureuse - psychologie descriptive et psychoanalyse. P.U.F. Paris, 1947.
- 8) Ey, H.：Jalousie morbide. In：Etude Psychiatriques II. p.483, Desclée Brouwer, Paris, 1950.
- 9) Shepherd, M.：Morbid jealousy, some clinical and social aspects of a psychiatric symptom. J. Ment. Sci. 107, 687-753, 1961.
- 10) Pauleikhoff, B.：Der Eifersuchtwahn. Fortschr. Neurol. Psychiat. 35, 516-539, 1967.
- 11) Tellenbach, H.：Zur Phänomenologie der Eifersucht. Nervenarzt 38, 333-336, 1967.
- 12) 荻野恒一：嫉妬妄想の構造と成立機制。精神病理学研究2. p.186, 誠信書房，東京，1977.
- 13) 小久保享郎：嫉妬妄想について—分裂病者における共同体感情の障害についての考察(1)。精神医学8, 479-483, 1966.
- 14) 山本巖夫：病的嫉妬，とくにその成立について—現象学的精神病理学の試み—。精神誌69, 1210-1236, 1967.
- 15) 倉持 弘 他：嫉妬(不実)妄想患者のErosの精神病理—殺人未遂の2症例より—。精神医学18, 741-748, 1976.
- 16) 宮本忠雄：嫉妬妄想の臨床と精神病理。臨床精神医学6, 527-535, 1977.
- 17) 石川昭雄 他：恋愛妄想と嫉妬妄想の併存例—恋愛妄想の臨床的研究(その2)—。精神医学20, 941-950, 1978.
- 18) 高橋俊彦：分裂病例とパラノイア例における嫉妬妄想の比較検討。分裂病の精神病理14(内沼幸雄編)。p.97, 東京大学出版会，東京，1985.
- 19) 迎 豊 他：嫉妬妄想の一例—ある夫婦の病歴から—。臨床精神病理9, 279-288, 1988.
- 20) 岡野憲一郎：嫉妬における苦痛の精神病理。臨床精神病理9, 315-326, 1988.
- 21) 田中雄三：病的嫉妬に関する精神病理学的研究の流れ。精神医学31, 1126-1137, 1989.
- 22) 大橋正和：嫉妬パラノイアの一例。分裂病の精神病理と治療4(飯田真編)。p.107, 星和書店，東京，1992.
- 23) 関根義夫：「嫉妬妄想」に関する一考察。精神誌95, 377-391, 1993.
- 24) 吉野啓子：退行期に発症した嫉妬パラノイアの1女性例。臨床精神医学22, 1569-1575, 1993.
- 25) 浅野弘毅 他：中年女性の幻覚妄想状態(第1報)—退行期妄想症再考—。仙台市立病院医誌14, 3-10, 1994.
- 26) Attali, J.(山内 昶訳)：所有の歴史。法政大学出版局，東京，1994.
- 27) 井上忠司：「世間体」の構造—社会心理史への試み—。NHKブックス，東京，1977.
- 28) Kraus, A. (岡本 進訳)：躁うつ病と対人行動—実存分析と役割分析—。みすず書房，東京，1983.
- 29) 高橋俊彦：中年後期のパラノイド状態について。分裂病の精神病理13(飯田 真編)。p.19, 東京大学出版会，東京，1984.
- 30) 倉持 弘：女性の幻覚と妄想。金剛出版，東京，1984.
- 31) 水上忠臣 他：中年女性の幻覚・妄想精神病—状況・年代論的考察。分裂病の精神病理9(川久保芳彦編)。p.133, 東京大学出版会，東京，1980.